

ミカン製 (未完成) を確かな形に

熊本県立八代農業高等学校 泉分校 森 麻里乃

ミカン色の木々の向こうには、天草の島々と島原雲仙。そして青い海と青い空。我が家の果樹園がある宇土半島は、デコポンが生まれた熊本県有数の柑橘産地です。

我が家は100年続くミカン農家で、温州ミカン、デコポンなど約4ha栽培し、ジュースなどの製造も行っています。現在、「人と地球にやさしい」をコンセプトに、減農薬栽培に力を入れています。にがり酢を葉面散布し、ミネラルの補給と病気の予防を行ったり、草生栽培により畑の生態系を豊かにすることで、益虫を増やし害虫被害を抑えています。こうしてできた我が家のこだわりのミカンは、インターネットを通じて消費者に直接販売もしています。しかし、まだまだお客さんが少なく、販売単価の低いグループ出荷に頼らざるを得ないため、経営は安定しているとは言えません。今後の目指す方向としては、栽培技術と品質、安全性の向上も重要ですが、販売力を高めていくことが我が家の大きな課題となっています。

私の通う泉分校は平家の落人伝説が残る八代市泉町にあります。泉分校には、「森で学ぶ」や「森を活かす」といった、自然環境を活かした授業が沢山あります。中でも、地域で育てられた木々を使い木工作品を作る「ウッドクラフト」は、私が特に魅力を感じる授業です。印象に残っている作品にホオノキのスプーンがあります。材選びから設計。粗削りを行ってから、細かな形づくり。微妙な歪みを手の感覚で確かめ、調整。最後に、手触りが良くなるよう紙やすりで丁寧に磨く。完成までに多くの時間をかけた、私の傑作です。

その作品を母に見せると、「木工の展示会に行ってみない？」と誘われ、訪ねてみることにしました。材質を活かしたデザイン。手作りならではのぬくもり。まるで木が活着しているのかのような存在感に私は衝撃を受けました。それらを手掛けたのは、木工作家の福山修一さんです。自作のスプーンを見ていただけるとのこと、期待に胸を膨らませ披露しました。福山さんは「可愛らしいスプーンだね。僕では思いつかないようなデザインだよ。」と褒めてくださりました。さらに、私を導く大きなヒントをいただきました。「森さんの家はミカン農家だからミカンの木を使ってみたら？」この何気ない一言で私と、そして森果樹園に立ち込めた霧が晴れ、ひとつの道がはっきりと見えた気がしました。

早速、学校の木工室にミカンの剪定枝を持ち込み、スプーンの製作を始めました。デザインは、掬ったものがこぼれにくいように、つぼの部分深く仕上げました。しかし、ミカンの木は思ったより小刀が入りづらく、削りづらいものでした。また、乾燥不足で、形をとりづらい部分ありましたが、今までの授業で培った技術で、ミカンと木工のコラボ作品が完成しました。そこで、森果樹園がミカンジュースを提供しているレストラン「O megane」の中川さんにミカンの木工作品について意見を伺いました。「面白いアイデアだし、うちの商品とコラボしてみたいね!!」私が考えていた木工で付加価値をつける発想が、一歩踏み出した瞬間でした。また、ターゲットの選定、クオリティーと価格についてのアドバイスをいただき、より現実的に販売に向けてイメージすることができるようになりました。

ところで皆さん、農産物を、どんな基準で選んでいますか。見た目ですか。価格ですか。それとも産地ですか。これまでも6次産業化など様々な差別化が模索されてきました。しかし、日本は少子高齢化、人口減少が進み、国内の農産物の消費量は減少していくことでしょう。対して海外への輸出はとても活発になっています。そんな中で、これまでの基準とは違った部分に農産物の価値を見出す人も沢山いるはずです。オリジナリティーや生産者の思い、農産物の背景にあるストーリーも価値になると私は思います。

森果樹園では、加工に利用できる直径2cm以上の枝が、毎年剪定くずの2割ほど出るため、木工作品の提供は実現可能です。切り落とした枝さえも作品にして届けることでミカンの持つイメージである「あたたかみ」や「さわやかさ」を、強く印象づけるでしょう。また、人目にはつきにくい栽培過程にもストーリー的価値を持たせるのではないのでしょうか。ミカン材の作品を青果や加工品に添えて販売することで、販路の拡大と森果樹園の知名度アップになり、課題である販売力の強化に繋がると考えます。

早速、今年の収穫期に合わせ、木工作品の製作を行っています。この取り組みを我が家だけに止めず地域へ波及するため、11月に地元の三角町のウォーキングイベントとの連携を計画しています。森果樹園でミカン狩りを行い、木工作品の製作体験を行えば、より多くの方々に農業の魅力や豊かさを実感していただくことができ、同時に地域の発展にも貢献できるはずです。

私は将来大学に進学し、農業経営や栽培技術について学びます。そして、森果樹園の5代目として、栽培とミカン材の有効的な活用を両立した経営を目指します。まだ始まったばかりの私の未完成な計画。いつか必ず、確かな形にしてみせます。

地震から見た熊本の未来

熊本県立熊本農業高等学校 米田 龍次

私は将来、熊本を支える土木技術者になりたい。

2016年4月14日と16日。熊本は総被害額3兆7850億円にも及ぶ2度の大きな地震にみまわれました。高校に入学したばかりの私は、期待と不安の中、宿泊研修で芦北町を訪れていました。その未経験の揺れに私の心は恐怖と不安でいっぱいになりました。「家族は無事に生きているのか？」夜も眠れませんでした。翌日追い打ちをかけるように、2度目の大きな地震が熊本を襲いました。芦北町では、高波注意報が発令され、私たちも暗い中毛布を羽織って、外のグラウンドに避難しました。とても寒く、暗闇の中「夢であってくれ」と願う程、恐怖と戦ったのを今でも覚えています。地震が発生し予定から遅れること3日後迎えるバスがやっと到着し、学校まで無事に帰ることが出来ました。学校に着くと、グラウンドも体育館も避難者であふれていました。後で知りましたが、避難者は千人程いたそうです。その光景を目にした私は、改めて地震が起きたのだと実感しました。そして父が迎えに来てくれ、家まで帰る事ができました。その道中、震源地である益城町を通って帰りました。中学校の頃友達と歩いて帰った道に走るひび割れ、今にも崩れそうな家屋、水田に入った巨大な亀裂。その全てが地震の壮絶さを物語っていました。私の家は瓦がほとんど崩れ落ちていて、少なからず被害を受けていました。「これからどうなるのか？」先が見えない不安から安心して眠れない日々が続きました。

それから数日後、「地震で被災された人のために何か出来ることはないか」と思った時に友人からボランティアをやっている事を聞きました。少しでも前を向いて進みたいと思い、ボランティアをする事を決意しました。ボランティアは、益城町の総合体育館でさせていただきました。私が総合体育館に行くと、人でごった返しており、廊下に段ボールを敷いて寝る人たちや、グラウンドにテントを張って生活する人などのいる状況でした。ライフラインは止まっており、配給に長い行列が出来ていました。他県からの自衛隊の方々による支援活動なども始まっており、「人の優しさ、暖かさ」を知ることができました。ボランティアでは、居住区の清掃や物資の運搬を行いました。その最中、道路の方をふと見ると作業着に身を包んだ人が道路の測量をしていました。そして数日後に体育館を訪れた時、あの悲惨な姿になっていた道路は車が走れるほどまでに補修されていました。

私はその道路を見て、とても強い感銘を受けました。あの大地震からまだそんなに日にちもたっていない。しかし一刻も早い復興をしようと、技術者達は第1線で動き出していました。「人のために働きたい」。その出来事から私は、農業土木科で何を学びたいのか、曖昧にしか考えていなかったものが少しずつ確かなものへと変わっていきました。

地震から一月過ぎると学校も始まり、授業の中で測量実習を行いました。あの時見た測量を学校で学ぶ事が出来ると分かり、専門知識習得に向けて力を入れました。現場実習では国土交通省に行かせていただき、先進地見学や熊本県庁主催のバスツアーへも積極的に参加をしました。特に現場実習では数々の進んだ技術を体験することができました。ICT技術を活用した無人機のバックホーやGNSS測量機など見たことないものばかりでした。見学先では、現場監督さんや働く技術者の方々に会うことができました。中にはOBの方もいらっしゃいました。そこで働く方々はとても爽やかな笑顔でいきいきと仕事をされていて、現場には活気があふれていました。

様々な現場を見ていく中で、こんな言葉を耳にしました。それは「創造的復興」という言葉です。創造的復興とは熊本県が掲げる言葉で、単に元の姿へ戻すだけでなく創造的な復興を目指すというものでした。私はその言葉を聞いてこれからの新しい熊本を創りあげていくのは私達だと考えました。地震で被災したところを補修するだけではなく、熊本地震を超えるような地震が来ても耐えるような耐震改修を熊本全土で行い、また津波対策として沿岸部の堤防を一新したいと考えました。熊本地震を経験して何も失ったものばかりではありません。得たものを活かしこれからの熊本の復旧・復興につなげていくことが創造的復興へと繋がるのです。そして、熊本地震が起きて、どれだけの被害を受けて熊本がどのように復興を遂げたのか。この熊本地震から経験した全てを後世に繋いで、伝えていく事が私だからできる事だと思います。これまでの熊本ではなく、これからの新しい熊本を創り上げていく。そんな技術者に私はなりたい。

これで発表をおわります。

「山の仕事ばかりしてたら、木が売れなくなったり、安くなったり。林業はものすごく不景気になった。不景気になったらまわりに人もおらんようになった。」

これは、昨年7月に参加した「聞き書き甲子園」で出会った森の名人、椎葉喜久子さんの言葉です。深刻な林業の衰退を語る寂しげな姿にも森と共に生きてこられた力強さを感じました。

私は、森と人との距離が遠くなっている今、人と森が共生していくために何が必要なのか、そのヒントを見つけたいという思いで、聞き書き甲子園に参加しました。取材に向かった先は日本三大秘境の一つと言われる宮崎県椎葉村。そこで出会ったのが、山菜やジビエなど森の恵みをふんだんに使った料理で「森の民宿」を営む、椎葉喜久子さんです。

名人はこれまで、ご主人と二人で自伐型林業を生業としていましたが、木材価格の低迷から林業経営の方向転換を余儀なくされました。林業の衰退と共に村が活力を失う中、名人は、「森と共に生きる」ことを大切に考え、これまでの森づくりを見直し、木材を生産するだけの場所から多くの人々が安らげる場所、森の恵みをありのままに活用していく場所へと方向転換されたのです。今では、全国各地から多くの来客者が訪れ、椎葉さんの民宿は、農林漁家民宿お母さん100選にも選ばれています。森を生かした取り組みは、山村を活性化させ、林業の新たな可能性を引き出したのです。名人にこれからの林業についてたずねると「木材でも山菜でもなんでも、森の恵みをしっかりいただくことが大事なんじゃないかな」と言われました。その言葉で、森の恵みを利用し、森と共に生きてきた先人たちのより良い文化を伝えることが大切であることを知り、森と人との距離を縮め、森と共に生きたいという私の将来の決意をより強いものになりました。

私は今、地元芦北の林業や山村文化、そして、森と人との関わりを深く理解するために地元林業研究グループや森林組合との現場研修、熊本県が主催する森づくり活動、芦北町で実施された木育キャラバン、更にインドネシア研修など様々な活動に参加しています。これらの活動で見えてきたことは、地域に根ざした森の活用と森を身近に感じてもらう取り組みの大切さです。その取り組みの実現のために私は、木育、森育をキーワードに「芦高版森育活動」を実践しています。地域の方を対象としたアンケートでは、76%の方が「1年以上森での活動をしたことがない」との結果になり、森林率70%を超える緑豊かな芦北でさえも森と人との希薄さが浮き彫りになっています。

そこで私たちは、多くの人に森の魅力を伝え、森を身近に感じてもらうために、本校演習林を活用して、年に3回、近隣の支援学校や小学校、一般の方々を森に招いての森育活動を展開しています。どうすれば森の楽しさや素晴らしさを伝える学習プログラムを考案することができるか日々取り組んでいます。

芦北支援学校佐敷分教室の皆さんとの森林教室では、「森の散策」、「葉っぱアート」、「ネイチャーゲーム」など森で楽しく学べるプログラムを立てました。私は、森の散策中に、ワラビやゼンマイなどの山菜について紹介しました。すると「これが、ワラビ？初めて知りました！」と驚きの声上がり、その後、「これは何ですか？食べられますか？」という質問が相次ぎました。私がたじろぐ場面もありましたが、何より森での活動に多くの発見をし、興味を持ってもらえたことが大変嬉しい瞬間となりました。この活動こそが、今の私にできる、森と人との共生するための一歩だと信じます。

森を理解し、森の素晴らしさを伝えていく。その中で、多くの人々が森の魅力を見出し、驚きや歓声の声をあげる姿を見て、「森と共に生きたい」という私の思いを加速させます。

更に私たちは、森育活動の中に新しいプロジェクトを立ちあげました。それは「マツタケプロジェクト」です。森林教室の事前整備をしていると樹齢20年生のアカマツ林が演習林内に眠っていることがわかったのです。以前は、マツタケを至る所で収穫できたと聞きます。現在は、ヒノキの人工林に変わりアカマツ林を見ることはなくなりました。アカマツ林の復活と共に、マツタケ栽培を地域の方と取り組むことで、芦北ならではの森の魅力を広め、地域林業の活力に繋げていきます。

林業の衰退は、山村から人を遠ざけ、森の良き理解者までも遠ざけてしまいました。しかし、今、全国各地で森の活用が新たな局面を迎え、森と共に生きる人たちが活発に活動されています。その人たちの元気こそが、地域と林業の活性化に繋がると考えます。

私は将来、広大な日本の森と共に生きる人たちの手助けになるために林野庁の森林官となり、地域の森を生かしたいと考えています。木材を生産する森、水を蓄える森、国土を守る森、安らぎを与える森、この素晴らしい森を多くの方々に身近に感じてもらい、ともに守り育てていきたい。「日本の森と共に生きること」、それが私の夢です。林業に携ることで、一步一步この夢に近づくことができると信じて、これからも頑張っていきます。